

九戸村の学校教育環境の将来を考えるシンポジウム

市町村による様々な小規模校対策の状況について



2021(令和3)年11月21日

青森中央学院大学 高橋 興

今日、皆さんと一緒に考えてみたいこと

(1)九戸村の小・中学校の現状を再確認しよう。

～ ①定員をめぐる厳しい状況 ②学校設置の法制度～

(2)全国各地で進む小規模校対策の状況

～ 現状維持(様々な工夫)、統廃合、小中(高)一貫教育～

(3)本村の今後を持続性重視で具体的に考えよう。

～ よそ者で的を射れるか？よそ者だから見える・・・？

1 九戸村の小・中学校の現状を再確認しよう。

(1)本村小中学校の現状①定員をめぐる厳しい状況

(児童数)全5小が学級定員を下回り。4小学校で各2つの複式学級
(課題?)複式学級担当教諭の経験年数(8人中25~28歳が4人)

(1)本村小中学校の現状②教員定数の法制度(小/教員数)

〈3学級〉 校長1 教頭0 担任3 担任外0.75 事務職0.75

〈6学級〉 校長1 教頭0.75 担任6 担任外1.0 事務職 1.0

※養護教諭は全校配置 生徒指導担当は全校で無配置

(1)本村小中学校の現状③村にどんな打開策があるか?

現状維持 村費による教員増(06年法改正で可能) 他の方策

2 全国各地で進む小規模校対策の現況①

(1)現状維持 — 様々な工夫をし統廃合を避け存続 —
私見ではどの事例も持続性に疑問符

事例①「チャレンジ・プラン」(兵庫県香美町) 2013年度～

町内10小学校のうち9校が小規模で複式学級多数

9校を2グループに編成。同学年による多人数(合同)授業実現

合同授業は1回3時間 年間10回(30時間)→膨大な準備作業

事例②「山村留学制度」(長野県北相木村) 2009年度～

民間学習塾(花まる学習会)と連携し首都圏等から児童を集める。

2 全国各地で進む小規模校対策の現況②

(2)学校統廃合 + 様々な取り組み

様々な取り組みも多くは単なる「統廃合の手段」として批判

小規模自治体と大・中規模自治体の取り組みとは区分が必要

事例①「絹義務教育学校」(栃木県小山市) 2017年度～

絹中学校区の3小学校統廃合に合わせた取り組み

長い時間をかけた丁寧な取り組みと既存校舎改修等で高評価

事例②「大原学園」(京都市) 2009年度～

小中一貫校化(保育園併設)により統廃合阻止

奈良市立田原小中学校とともに小規模一貫校サミットを主導

2 全国各地で進む小規模校対策の現況③

(2) 学校統廃合 + 様々な取り組み

様々な取り組みも多くは単なる「統廃合の手段」として批判
もう少しきちんと評価されてよい取り組みが多くあるのでは？

(3) 統廃合できない学校による取り組み

事例④「奈留地区小中高一貫校」(長崎県五島市) 2006年度～

一貫教育で校種の違う3校すべての存続を目指す実践

小中学校は施設一体型校舎を建設し県立高校と渡り廊下でつなぐ。

小中高の時程の調整とノーチャイムによる日課

一貫による外国語教育に力点→海外から生徒募集の検討

3 村の今後を「持続性重視」で具体的に考えよう

(1)今のままで良いか？このままで村の未来は？

子育て世代は、どう動くか考えなくて良いか。

(2)小中問題の混迷は伊保内高校の存続と無関係？

村の存続や発展のため、とても大切な学校ではないか。

県立高だが、村もさらに力を注ぐ必要はないか。

(3)教育環境が及ぼす影響は多方面に及ぶ！

状況を前に進めるため、知恵を絞るときではないか。